

日曜日の白い雲

上

原田康子

日曜日の白い雲

上

原田康子

講談社

日曜日の白い雲上

一九七九年九月十八日 第一刷発行

著者——原田康子

©Yasuko Harada 1979, Printed in Japan

発行者——野間省一

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京三—九四—二二(大代表) 振替東京六—三三

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——株式会社国宝社

定価——八九〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。」

目次

みずうみ

5

故郷

41

爆音

87

葉影

121

この町

147

夜霧

194

絹雲

241

装
幀

荻

太
郎

日曜日の白い雲
上

みずうみ

I

夢のなかに郭公^{かつこう}の声がしのび入ってきた。

湖岸の林で鳴きだしたのであろうか、夢うつつの百合の耳には、遠い国の遠い森の奥で鳴いているように、低くきれぎれに聞こえた。夢に相違ない湖中のありさまのほうに、たしかな現実のようであった。

水のなかにはほのかな明るみがあった。見通しは利かないけれども、水自体がひかっているのか、周囲はぼんやりとあかるい。水草のようなものは見えなかった。魚の影もなかった。

その水のなかを、百合が湖底にむかっていた。

百合は衣服をつけていない。水着もつけていない。まったくの裸である。

裸の百合には、自分の姿は見えないはずだったが、夢を見ているほうの百合には、水中カメラでとらえた画像のように、裸で水底へむかって行く自分の姿がはっきり見えていた。

百合は、泳いでいるわけではなかった。軽く水を蹴っているようなのだが、手は動かしていなかった。行儀のよい人魚のように、はすかに水を分けて下へとむかっていた、息苦しくはなかったし、水の冷たさも感じなかった。むしろ、空中でも浮遊しているように体が軽かった。

湖底はあかるかった。あたりのあかるさとはべつの、奇妙なあかるさである。空飛ぶ円盤かなにか、巨大な発光体のようなものが水底に沈んでいて、そこから光りが上方に散っているようである。

それは、だが、空飛ぶ円盤などではなかった。

百合は見とけたわけではないが、それがなにか知っていた。

それは、百合と同様の裸の女たちである。ひとりふたりの数ではない。何十体とも知れぬ女の裸体が湖底を埋めていた。女たちは目を閉じて静かに横たわっているが、眠っているのではなかった。ことごとく死んだ女であった。

あそこへ行つてはいけない、と百合は思う。

死体の仲間入りをしてはならない。郭公の鳴く岸へもどったほうがいい。

なかばは夢と承知しながらも、百合は必死に水中の自分を引き止めるのだけれど、裸の百合は見向きもしなかった。かえってスピードをあげて、心地よさそうにすいすいと水底へ近づいて行く。

湖底のあかるさがました。やがて、女たちの顔かたちがあきらかになる。石膏色せうこしきの乳房が見えてくる。

「ああっ」

百合は声をあげ、自分のその声で目をさました。

のどが乾いていた。しばらく動悸が静まらなかった。

明けがたが近づいて、部屋の闇は薄れかけていた。郭公の声はとぎれていたが、やがてまた鳴きはじめた。ホテルの裏山で鳴いているらしく、間近な声である。ほかには何の物音もしなかった。

支笏湖しこくのほとりのホテルである。ひと口に支笏湖と言っても、恵庭岳直下のこのあたりはオコタンと呼ばれていて、最も奥深い湖岸である。みやげ物屋はむろんのこと、百合が泊まっているホテルのほかには旅館もなかった。

百合は夜具から出ると広縁に立って行って、カーテンを細目にあげてみた。
みずうみにのぞんだ客室だった。

日の出にはすこし間があって、みずうみを取りかこむ山々も林も、まだ黒く静まっていた。ホテルの左手に突き出ている小さな岬の上方に、わずかながら赤味がにじんでいる。明けがたの微光が流れて、湖面はにぶく光っていたが、沖は鋼色はがねいろにかげっていた。

百合は、とっさにカーテンをしめた。死体どころか、魔王でも棲んでいそうなみずうみの色である。

百合は窓ぎわの椅子に腰をおろすと、テーブルの上のたばこの袋を取りあげて、一本、口にくわえた。

どうして、あんな夢を見たのであろう。水辺のホテルに泊まったので、夢で水底を見たのであろうか。

百合は、死ぬ気でこのホテルに來たわけではない。離婚したくらいで、死んでなどいられない。死ぬものか、と百合はことあるごとに自分に言い聞かせてきた。

きのうも、遊覧船でこのホテルへむかう途中、呪文でもとなえるように、百合はそのことを胸のなかで繰り返した。

死ぬものか。わたしは死んだりはしない。みずうみに飛びこむようなまねはしない……。

百合には死ぬ気はなかった。岩見沢の実家にもどるつもりで、きのうの午後、百合は千歳空港に降り立ったのであるが、ふらりとこのホテルへ来てしまったのだ。

ひよっとすると、きのう百合は、みずうみを見過ぎたのかも知れない。みずうみにのぞんだ部屋だから、四六時中みずうみが目にはいるのは当然として、食事や入浴の時間をのぞくと、たいして百合は広縁のこの椅子にもたれて、ぼんやりみずうみを見ていたのだ。何本もたばこを吸った。暮れ切ってから、百合は椅子から動かなかった。

だから、小卓の上の灰皿は吸いがらでいっぱいである。灰皿のまわりも、灰がこぼれていてきたならしかった。

百合がたばこを吸ううちにも、日の出は近づいていた。カーテンを引いていても、戸外の変化は感じとれる。郭公のほかにも小鳥が裏山でさえずりだして、湖畔は急速に目ざめていくようだった。

六月の十日すぎであるが、山間のみずうみだけに明けがたは冷えこむようだった。ゆかた一枚の百合はさむ気がした。

百合は寢床にもどったものの、すっかり目がさめて、二度寝はできそうもなかった。起きだすには早すぎる時間であったし、起きだしたところで、散歩に出かけるような気力はない。百合は寝不足であった。

昨夜、百合が床にはいったのは十一時近くだったが、ふくろうの鳴き声が耳について、おそく

まで寝つかれなかった。

ふくろうではなくて、このはずくであつたかもしれない。いずれにしろ、気持ちのよい声ではなかった。闇の底から聞こえてくる滅入るような鳴き声だった。百合はいらだち、いっそのこと、みずうみへむかつて駆けて行きたいようだった。

百合に水界の精のような魔力があるなら、漆黒の夜の湖上を駆けてみたかった。

やはり、百合は死をおもっているのかも知れない。死ぬまいと考えながら、死への願望が百合の心底にひそんでいるようだった。

百合はまた夜具を出ると、カバンのなかをさがして、睡眠薬の袋を取りだした。

睡眠薬は、横浜の家の近所の医者に出してもらったものである。夫との仲がこじれて以来、百合は睡眠薬を常用するようになっていた。

もっとも、離婚のごたごたにけりがついて、役所に届けを出してからは、百合はなるべく睡眠薬をつかわないように心がけていた。

睡眠薬の一粒を手取るたびに、百合は自分の弱さと向かい合うような気がする。飲みこむくすりの分量だけ、百合の心の内部は腐蝕し、くずれていくように思われた。

昨夜も百合は睡眠薬を飲まなかった。ふくろうの鳴く夜ふけに、睡眠薬を手取るのはおそろしかった。百合は耳をふさぎ、夜具をかぶり、寝返りを打っているうちに、どうやら寝入ったものらしい。

くすりの袋はかなりかさばっていた。百合が離婚の手つづきをすませたのは、ほぼひと月まえである。飲まないように心がけながらも、百合は医者からくすりをもらいつづけていたから、くすりがたまっていた。横浜を引きはらう直前にも、百合は二週間ぶんのくすりをもらってきた。

百合の母親は医者である。岩見沢の実家に帰りさえすれば、睡眠薬などいくらでも手にはいりそうなものであるが、ことはそう簡単に運びそうもない。かえって、入手は面倒になりそうである。薬剤師や看護婦に、百合がこっそりたのんだとしても、たちまち母に筒ぬけになりそうだった。

百合は、くすりをかぞえてみた。十錠ずつバックされたものが三枚と、八錠のバックが一枚ある。つまり、全部で三十八錠ある。

これを一どきに飲むと、死ぬことになるのだろうか。

百合は首をかしげた。この倍もあると致死量に達しそうだが、これだけでは少々不足のように思えた。

だいたい、このくすりにどのくらいの効きめがあるのか、百合にはわからなかった。処方通りに二錠飲んで効かない場合が多い。黄色い小粒の錠剤だった。

百合は、母が医者であるだけではなかった。わかれた夫も医者であった。母とちがって、夫は病院勤務の医者なので、身辺にはそれほど薬品を置いていない。たとえ置いてあったとしても、夫に睡眠薬をせびれるような状況ではなかった。

百合は二錠飲んだ。室内があかるくなって、二錠では心もとなく、百合は冷蔵庫からウイスキーの小壺を出すと、水で薄めて一ぱい飲んだ。

ウイスキーのせいかわ、くすりの効きめは早く、こんどは百合は夢も見なかった。

つぎに、百合の眠りを破ったのは、電話のベルのけたたましい音だった。百合は夜具から体をのりだして、送受器に手をのばした。

「おはようございます。九時でございます」

歯切れのよい、女の若い声が耳にとびこんできた。

「は？ はい」

百合が口ごもっているうちに電話は切れた。ややたつて、ようやく百合は、いまの電話がモーニング・コールだと気づいた。昨夜、百合は、九時のコールをたのんでおいたのである。

くすりの気がぬけ切らなくて、百合は起きだすのがおっくうだった。しばらく床のなかでぐずぐずしていた。

2

百合は、二時すぎまで湖岸のホテルで過ごした。

食事を終えると、もう十時半であつた。一時間後に出る船があつたけれど、あたふたと宿を立つのもいやで、百合は午後の船で帰ることにしたのだった。

支笏湖も奥のこのホテルは、交通の便がよいとは言えなかつた。恵庭山麓をめぐる札幌へ通じる道路があるが、バスの便はない。百合のような旅行者は、遊覧船で千歳寄りの湖岸へ戻るほかはなかつた。

船の時間が近づくまで、百合は縁の椅子にぼんやりもたれていた。テレビも見なかつたし、新聞を手取る気にもなれない。散歩に出かけるのもおっくうだった。

遠くで山鳩がものうげに啼いていた。あとは廊下を行き来する足音も耳につかない。平日だし、観光シーズンの盛りにはまだ早い季節だから、客は少ないのかも知れない。客は百合ひとりであるかのように、ホテルはひっそりしていた。

つつじが水辺の庭をいろどっていた。百合が住んでいた保土ヶ谷のかいわいにもつつじは多か

ったが、つつじの花期はとうに終っていた。

それより百合には、ことしのつつじを見た記憶がない。つつじはことしも咲き、百合も目にしたはずであるが、百合には花に目をとめる余裕がなかった。つつじがいつ咲き、いつ散ったものか。梅も桜も木蓮も、この春の花の色は、吹きぬけていった風のように百合の心に残っていないかった。

むかし、百合はこのホテルへ来たことがある。百合が大学にはいった年の夏であったから、十年あまりもまえのことになる。百合は、大学で親しくなった友人とふたりで、支笏湖へあそびに来たのだった。

百合も友人も音楽学部的女子学生だった。おなじ器楽科ではあったが、百合はヴァイオリンを専攻し、友人はフルートをまなんでいた。

ふたりが泊まったのは、この建物ではなかった。ここは和風の本館であるが、となりに洋風の別館があり、そこからさらに一キロほど奥に、オコタン荘という山荘風の可愛らしいロッジがあった。ふたりはオコタン荘に二泊したのであるが、ボートを漕いだり、泳いでみたり、夜はおそくまで落ちないおしゃべりにふけたものである。

昨夜のメイドの話によると、オコタン荘は札幌オリンピックのさいに建てかえられて、いまは新館と呼ばれているらしい。山麓に道路がつけられたのもオリンピックの直前である。百合がオコタン荘に泊まったのは道路などないころで、遊覧船が唯一の足だった。

この十年あまりのあいだに、百合にはなにがあったというのだろう。

大学を出て、東都フィルに入団した。館林昌也と結婚し、そしてわかれ、オーケストラの席も失った。恵庭山麓の変化はともかく、百合の変化はかなりのものだった。

二時になってから、百合はようやく腰をあげて荷物をまとめた。小型の旅行カバンひとつだから、まとめるのも簡単である。ほかにヴァイオリンケースがあったが、それは開閉の要がない荷物である。

百合は、部屋を出て支払いをすませた。メイドもロビーで待っていて、旅行カバンとヴァイオリンケースを両手にさげると、先に立って玄関を出た。

「あら、あたしが持ちますわ」

百合は、あわててあとを追った。旅行カバンはともかく、ヴァイオリンケースはメイドに持たせたくない。どんな場合でもヴァイオリンケースだけは、百合は自分で持つ習慣だった。

「よろしいんですよ。そこまでですから」

メイドは、遠慮と受けとったのか、笑顔で言った。角型のケースだから、メイドは楽器のケースだとは気づかないのかも知れない。

玄関の横をくだと、そこがもうホテル専用の小さな棧橋だった。百合のほかに出立の客はなかった。ほどなく遊覧船が崎をまわって近づいてきた。

支笏湖の北岸には、いくつかの温泉がある。百合が泊まったオコタン温泉もそのひとつであるが、崎のむこうがわにも温泉があった。いずれも、旅館が一、二軒という閑寂な温泉である。

遊覧船は、それらの温泉に立ち寄りながら、千歳寄りの発着場へむかうわけである。つまり、百合が乗った船は、遊覧船であると同時に、温泉への客をはこぶ船でもあった。

別館の棧橋からは、若いふたりづれが乗りこんで来た。本州からの新婚旅行のカップルらしく、カバンにはそれぞれ航空会社のカードがさがっている。座席にならぶと、女はあまえるように男の肩に頭をもたせた。

最も奥の新館は、現代風の小ホテルにかわっていた。屋根の色も、テラスの日覆いの色もあかるく、オコタン荘当時の素材なあじわいは残っていなかった。

新館の棧橋をはなれると、船は大きく反転して崎をまわった。それから、崎の蔭の温泉に立ち寄ると、こんどはまっすぐ東岸の発着場へむかった。

波が出て、小さな遊覧船はゆれはじめた。崎に抱かれたホテルのあたりは波もおだやかであるが、湖心に出ると、さすがに波が高い。山にかこまれた支笏湖は風が出やすく、もともと波の荒いみずうみである。きょうはおだやかなほうかも知れなかった。

百合は、窓からのぞきこむようにして、ゆれうごく水面を見おろしていた。支笏湖の水深は何メートルなのか、たしかな数字は百合も知らないけれど、このみずうみが日本有数の深湖であることは知っている。また、支笏湖に投身しても、死体は決してあがらないという話も聞いたおぼえがある。

このみずうみに身を投げた女もいるに相違ない。それらの投身者は、明けた夢で見たあの女たちのように、静かに水底に横たわっているはずはなかった。白骨化し、その白骨も水流の力で四散して、小石や泥といっしょに湖底に沈んでいるにちがいがなかった。

百合は、水面から目をあげた。

チップ釣りの小舟が、湖上に点々と散らばっていた。平日のせい、舟の数はそれほど多くない。樽前山の噴煙が横に流れていた。すこし雲があったが、みずうみはあかるくひろがっていた。

風は、さわやかというよりも冷たいほどである。百合は薄地のサファリコートを羽おっていたが、それでも肌風に風がおった。きのうの羽田のむし暑さがうそのようだった。